

刊行によせて

白川方明（日本銀行前総裁）

どの国でも中央銀行は興味深い対象であり、時として必要以上に神秘的な組織と見られています。そのことも反映してか、中央銀行に関する書物や論文は夥しい量に上っています。私自身も若い頃から折に触れてそうした著作を読むことは多かったのですが、日本銀行で様々な仕事を経験するにつれ、既存の著作に登場する中央銀行と自分の感じる中央銀行との間に、「感覚」のズレを感じ始め、時と共にそうしたズレが大きくなってきました。

このズレは単に金融政策、例えば、「量的緩和政策」の有効性をどう評価するかといった次元の話というより、中央銀行の存在自体に関わる話でした。私の感じた「感覚」のズレを敢えて整理すると、以下の3点になります。第1は、中央銀行は通貨を供給し、その価値を維持することを目的とする組織であるにもかかわらず、通貨を通貨たらしめる様々な仕事、とりわけ決済や決済システムに関する認識や分析が少ないことです。第2は、金融政策も含め、中央銀行の仕事は行政的な指示や命令ではなく、具体的な取引を通じて実行されるものであるにもかかわらず、そうした銀行業務（バンキング）の視点が乏しいことです。第3は、中央銀行もひとつの組織であるという自明の事実が意外に意識されていないことです。組織であるということは、組織や組織の構成員の行動に影響する様々なガバナンスのメカニズムや、必ずしもガバナンスという言葉では包含されないモラルや職業倫理といった要素が重要となることを意味します。ガバナンスのメカニズムについて限っても、本書で言うパブリック・ガバナンスの問題に関心が集中し、中央銀行という組織内部のガバナンスについて議論が及ぶことは稀です。

以上3つのテーマは一見すると、細かな実務的なテーマです。しかし、しばしば「本質は細部に宿る」と言われるように、これらの点について理解しない限り、壮大な政策論も空虚な議論になり勝ちであるというのが私の実感です。もちろん、経済学者も決してこれらのテーマを無視してきたわけではありません。過去20年間ほどで、取引コスト経済学などの新制度経済学は大きな発展を遂げましたし、O. Williamson のノーベル経済学賞受賞（2009年）はこれを端的に示すものです。これらの新しい学問的潮流は中央銀行論にも大きな進歩をもたらさうものです。



が、残念ながら、そうした試みはまだ十分にはなされていません。誰かがこのギャップを埋めなければなりません。折谷吉治教授の『中央銀行制度の経済学』は正にこのチャレンジングな課題に真正面から取り組んだ新鮮なフレーバーをもつ中央銀行論の著作です。海外を見渡しても、寡聞にして、こうしたフレーバーをもつ中央銀行論の著作は知りません。

私事になりますが、私は著者の折谷君—と敢えて呼ばせて頂きますが—と同じく 1972 年に日本銀行に入行し、いわゆる「同期」に当たります。外国局（現：国際局）と特別研究室（現：金融研究所の前身）では机を並べて仕事をしました。折谷君は若い頃には時系列分析を応用したマクロ金融経済の研究、その後、金融機関の考査や決済システムなどバンキング業務で経験を積みました。国際的な経験も豊富で、東アジア諸国や体制移行国の中央銀行制度や決済システムの構築にも関与しました。本書には、そうした折谷君の日銀時代の多様な経験が反映されています。研究者は、常に新たな視座を提示する姿勢が重要です。本書には、中央銀行を愛した折谷君の 30 年に亘る日本銀行での経験と、明治大学での研究に基づく斬新な仮説や解釈が随所に示されています。もちろん、本書の読者には、ここでの仮説や解釈に対し共感と異論の両方があり得るでしょうが、こうした研究をさらに深化・発展させていくことが、中央銀行をさらに、進化させていくことにつながると信じています。折谷君と同様、日本銀行で長く仕事をしたひとりの中央銀行マンとして、本書が中央銀行に関心のある読者にひとりでも多く読まれることを強く願っています。

目次

はじめに	7
------	---

第Ⅰ部 中央銀行制度の基本構造

第1章 金融システムにおける中央銀行の存在理由	15
第1節 金融システムの3類型	18
第2節 金融システムの3類型と経済システムの3類型との対応関係	25
第3節 インターバンク取引の取引コスト分析	30
第4節 中央銀行制度の諸問題に対するインプリケーション	40
第2章 中央銀行のガバナンス・ストラクチャー	59
第1節 新制度経済学ของガバナンス・ストラクチャー理論	60
第2節 中央銀行のガバナンス・ストラクチャー問題への適用	72
第3節 中央銀行におけるボード制の設計問題	78
第4節 中央銀行の資本金の意義	89
第3章 中央銀行のパブリック・ガバナンス	105
第1節 取引コスト経済学への適用	106
第2節 エージェンシー理論への適用	124
第3節 公共選択論への適用	148

第Ⅱ部 中央銀行の主要機能

第4章 現金通貨供給機能の多角化	169
第1節 取引コスト経済学における組織の多角化理論	170
第2節 中央銀行への多角化理論への適用	178
第3節 現金通貨供給機能への適用	187
第5章 金融政策のガバナンス理論	209
第1節 問題の所在	210
第2節 取引コスト経済学からのアプローチ	218